http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第２１０２号）

指導資料　生徒指導 第80号

鹿児島県総合教育センター
令和３年10月発行

対象校種　小学校　中学校　義務教育学校　高等学校　特別支援学校

多面的な児童生徒理解と多層的な支援に向けて
－インシデント・プロセス法による事例検討－

生徒指導上の諸課題の解決においては，チームで支援策を講じ，個に応じた支援をしていくことが重要となる。そこで，多面的な児童生徒理解と多層的な支援につながる，インシデント・プロセス法による事例検討について提案する。

１　はじめに

生徒指導部会や学年部会等での事例検討において，今後の方向性や取り組むべき内容等が曖昧なまま終わってしまうことがないだろうか。その解消の一つにインシデント・プロセス法による事例検討がある。

インシデント・プロセス法とは，マサチューセッツ工科大学のピコーズ教授夫妻が提唱した事例研究法の一つである。実際に起こった出来事（インシデント）を基に，質問を通して参加者が出来事の背景にある事実を収集し，問題解決の方策を参加者全員で考えていく。

インシデント・プロセス法を活用した事例検討の意義としては，次のようなことが挙げられる。

- ○　グループ協議を中心に行うことで，参加者全員の問題意識を高められる。
- ○　一人一人の参加者が，当事者の立場で考えることにより，主体的で積極的な検討となる。
- ○　参加者の情報収集能力や問題発見能力，実行可能な解決策を立案する能力などを養うことができる。
- ○　事例を共有体験するため，様々な角度からの解決策が出やすく，その後の実践的な支援に結び付きやすい。
- ○　事例提供者は，資料作成等の事前準備をほとんど必要としない。

２　多面的な理解と多層的な支援

インシデント・プロセス法を活用した事例検討では，事例提供者と参加者間において，一問一答方式による質疑応答を行い，解決すべき問題点は何かを明確にし，チームで支援策を考えていく。例えば，Ａさんの事例であれば，質疑応答及びアセスメント（児童生徒理解）を通して，Ａさんに対して，誰がどのような支援ができるのか，考えていくことが一般的である。

(1) 多面的な理解

ここで重要になるのが，参加者の質問である。質問を通してアセスメントを深めていくことから，事例提供者の推測や感想を求めるのではなく，事例提供者が把握している事実に関する質問のみをしていく。「欠席日数は何月頃から増えてきたか。」など，意図をもった質問をしていくことが大切になる。また，事例の全体像を考え，具体的に「Ａさんにどのようなストレス反応（**表１**）が出ているか。」，「ストレスの要因（ストレッサー）（**表２**）は何なのか。」を探求する質問をすることで，Ａさんに対する多面的な理解を進める。

表１　ストレス反応の例

身体	頭痛や腹痛がある，疲労が蓄積している，寝付けない，など
思考	全てを悪く考える，状況判断や意思決定が鈍る，など
感情	喜怒哀楽が激しい，常にイライラしている，焦りや不安が強い，など
行動	落ち着きがない，集中できない，食欲不振又は過食がある，など

表２　ストレスの要因（ストレッサー）の例

物理的ストレッサー	温度や音，光など
生理的ストレッサー	病気や怪我，体調不良など
心理的・社会的ストレッサー	友人関係，時間，課題など

(2) 多層的な支援

先に述べたように，一般的なインシデント・プロセス法を活用した事例検討では，参加者全員でＡさんのニーズ（必要としている支援）に応えられる支援策を第一に優先して考えていく。しかし，Ａさんを支援する者（以下，支援者）が限られると，支援者の負担が大きくなることがある。

そこで，Ａさんに対する支援策のみではなく，参加者全員で支援者のニーズを引き出し，支援者の支援策まで考えていく。つまり，関連する「人」同士が支え合う体制を整えていくことで，Ａさんへの支援が深まっていく。この際，担任や養護教諭，保護者，学級の児童生徒への支援策まで考えていきたい。

また，支援策を考える際は，「どの時期に，どのくらいの頻度で行うか。」まで検討することも大切である。つまり，支援の「タイミング」を見極め，実践していくことで，支援の浸透につながっていく。

以上のことから，ストレス反応やストレッサーを探求しながら多面的な理解を図り，「人」と「タイミング」を考慮した多層的な支援につながるインシデント・プロセス法による事例検討を，校内でどのように実施していくか提案する。

３　校内で実施するインシデント・プロセス法による事例検討

(1) 事例検討の方法

校内における事例検討の場としては，生徒指導部会や学年部会等が考えられる。生徒指導部会や学年部会等が，単なる現状報告の場であってはならない。また，担任や学年部等の教職員に対する指導・助言のみの場であってもならない。まずは，児童生徒及び担任をはじめとする支援者へチームによる支援が実践できるよう，参加者全員で検討する場にして，特定の支援者の負担感が増すことがないようにしたい。インシデント・プロセス法による事例検討を浸透させ，児童生徒の多面的な理解と，児童生徒及び関連する支援者を多層的に支援していくことが大切である。

事例検討で使用するワークシートの例を**図１**及び**図２**に，事例検討の流れの例を**図３**に示す。なお，**図１**はワークシートの表面もしくは左面に，**図２**は裏面もしくは右面に配置するとよい。

【インシデント・プロセス法用ワークシート】

事例の概要：（　）年（　）組　氏名（　　）

○　情報収集・整理：質問で明らかになった情報をまとめる。

	質問内容	質問に対する情報提供の内容
本人に関して		
家庭に関して		
学校に関して		
その他		

○　アセスメント：現在の状態をどう捉えるか，多面的に考える。

日常生活の情報，「学校楽しぃーと」，「SNS　チェックシート」などから状態像を分析・考察する。

■ 個人

■ チーム

【参考】：○○ということがあったため（原因），△△ということになっており（状況：不登校，生活の乱れなど），本人は××という不安から（心理状態），□□という状態になっている（現状）。

図１　ワークシート（表面もしくは左面）の例

○　支援方針（目標）の立案：アセスメントした状態像から指導・支援の方向性を決める。

目指す姿を定め，今後の指導・支援の目標を決める。

■ 個人

■ チーム

【参考】：○○○○といった対応をすることで，△△△△ということになり，□□□□という状態（状況）になるのではないか。

○　取組内容の検討：具体的で多層的な支援方法を協議する。有効性，実効性を考慮して，順位付け等までしてもよい。

児童生徒への関わりを，今後具体的にどう実施していくかを整理する。

誰が	誰に	どの時期（どんな場合）に・どのようなことを・どのくらいの頻度で	備考

図２　ワークシート（裏面もしくは右面）の例

①	事例の提示（200字程度）	【３分】
②	情報収集	【14分】
③	アセスメント（個人→全員）	【10分】
④	支援方針（目標）の立案（個人→全員）	【８分】
⑤	取組内容の検討（個人→全員）	【10分】
⑥	振り返り	【５分】

図３　事例検討の流れの例（50分を想定）

①の「事例の提示」では，事例提供者は，「学校楽しぃーと」（当センターが開発した，児童生徒の学校適応感を把握するためのもの）等の質問紙の結果があれば提示し，実際に起こった出来事（インシデント）を含めて，事例の内容を簡潔に伝える。その際，事例に関する事実のみを話し，事例提供者の考えを話す必要はない。参加者は，記録をしながら，どのような情報が必要かを考え，質問事項を整理する。

②の「情報収集」では，事例に挙がっている児童生徒の現状（ストレス反応），背景や原因（ストレスの要因），対応策の検討のために必要な情報を，参加者が事例提供者に一問一答方式で質問し，情報を収集していく。①の「事例の提示」を簡潔なものにとどめるのは，②の「情報収集」がチームで支援策を講じるための重要なポイントになるからである。通常，事例検討の際，情報提供者が綿密な情報提供をすることが多い。そのための準備やこれまでの取組の整理などに情報提供者は多くの時間を要し，負担を感じることもある。そこで，①の「事例の提示」を簡潔にして，参加者が一問一答方式により情報収集をすることで，参加者自身の当事者意識が高まり，より多面的な実態把握につなげることができる。

③の「アセスメント」では，収集した情報を基に，個人で状態像を分析・考察し，その後，全員（チーム）で状態像をまとめていく。

④の「支援方針（目標）の立案」では，アセスメントを基に目指す姿を定め，どのような支援が必要であるか方向性をまとめる。個人で考えた後，全員（チーム）でまとめていく。支援方針（目標）は，具体的な取組内容（「明日，家庭訪問をする。」，「友達と面談をする。」など）ではなく，「○○といった対応をすることで，△△ということになり，□□という状態（状況）になるのではないか。」というように，長期的な視点で見た目指す姿を基に支援方針をまとめる。この支援の方向性となる「支援方針（目標）の立案」は，②の「情報収集」と同じく，チームで支援策を講じるための重要なポイントとなる。目標（支援方針）があることで，支援の方向性を意識し，協働性が高まり，具体的な支援策につながっていく。

⑤の「取組内容の検討」では，「人」と「タイミング」を考慮した多層的な支援につながるよう，「誰が」，「誰に」，「どのような時期（どのような場合）に・どのようなことを・どのくらいの頻度で」行うか，個人で考えた後，全員（チーム）でまとめていく。有効性，実効性を考慮しながら整理し，順位付け等までしてもよい。

①の「振り返り」では，個人及びチームでの活動を振り返り，支援方針（目標），取組内容，留意点を確認し合う。

(2) インシデント・プロセス法による事例検討の例

事例の概要：（3）年（1）組　氏名（　大原　台　）

体育大会の選手決めで，友達から長距離走の選手を押しつけられ，それまでの友達への不満が爆発し，不登校傾向が見られるようになった。以前は，欠席することがほとんどなかったが，現在は学校を週に２～３日欠席する状況にある。母親も困っている。

○　情報収集・整理：質問で明らかになった情報をまとめる。

	質問内容	質問に対する情報提供の内容
本人に関して	・部活動は？	・バスケットボール部に所属。
	・２学年のときの交友関係は？	・２学年のときは，友人関係も良好で部活動にも積極的に参加できていた。
	・成績や性格は？	・成績は学年135人中30番程度。性格はまじめで頑固なところがある。
	・今の生活状況は？	・家では自分の部屋に鍵をかけ一日中ゲームをしていることが多い。昼夜逆転の生活をしている。
	・兄弟姉妹は？	・３人兄弟の次男。兄は高校2年，弟は中1。
	・進路希望は？	・高校に進学したい気持ちがある。
	・食生活の状態は？	・食生活が乱れているのではないかと感じている。運動不足も考えられる。
	・家庭訪問では？	・家庭訪問しても部屋から出てこない。
家庭に関して	・家庭状況は？	・小学5年生のときから母と兄弟3人。
	・母親の帰宅する時間は？	・母親は，ファミリーレストランに勤めている。帰宅は毎日夜8時ごろ。収入は少ないようだ。
	・昼食はどうしている？	・欠席し始めた頃は，母親が昼食を食べたか確認していたようだが，最近はしなくなった。なお，母親が忙しく，十分な食事は準備されていないようだ。
	・本人の進路希望に対して，母親はどのように考えている？	・高校進学については，本人は「どこでも行けるところがあればいい。」と言っているが，母親は私立高校は経済的な理由から反対している。
	・家庭環境は？	・家の中は整理されているとはいえない状況。
学校に関して	・母親との連携は？	・母親との連絡は仕事中が多く，落ち着いて話ができない。帰宅も遅いので，電話することが厳しい。
	・本人との会話は？	・先日，放課後に面談をした際に，友達に対する不信感と進路のことで悩んでいることをようやく話してくれた。
	・本人が気にしていることは？	・顧問の先生が，自分のことをどう思っているのか気にしている。
	・担任として何か思うことは？	・高校進学の希望から授業を気にするようになっている。
その他	・クラスはどのような様子？	・クラスではもう一度，体育大会の選手決めをした方がいいのではという意見も出ている。

○　アセスメント：現在の状態をどう捉えるか，多面的に考える。

日常生活の情報，「学校楽しぃーと」，「SNS チェックシート」などから状態像を分析・考察する。

・　友達が無理やり長距離選手に選んだことがきっかけとなって，クラスメイトに対して不信感を抱いている。

・　個票を見ると１学期に比べて，「友達との関係」，「学級集団における適応感」，「学習意欲」の学校適応感が下がっている。SNSでのコミュニケーションはあまり取らなくなっているが，悩み･負担感を感じるようになっている。

・　高校進学の希望から，授業を心配し始めている。

○　目標（支援方針）の立案：アセスメントした状態像から指導・支援の方向性を決める。

目指す姿を定め，今後の指導・支援の目標を決める。

信頼している教師や母親と話す機会，友人と活動する機会を増やし，本人の日々の取組を認めることで，友達に対する不信感や学習面の不安の軽減につながり，安心感を抱くようになるのではないか。

○　取組内容の検討：具体的で多層的な支援方法を協議する。有効性，実効性を考慮して，順位付け等までしてもよい。

児童生徒への関わりを，今後具体的にどう実施していくかを整理する。

誰が	誰に	どの時期（どんな場合）に・どのようなことを・どのくらいの頻度で
担任・副担任	本人	家庭訪問時に，友達に対する不信感を十分に聴き，今後，どうしてほしいか本人の意向を確認する。
担任部顧問	学級の生徒部員	放課後や部活動時に，心配している友達の気持ちを十分に聴き，本人に伝える。
担任	本人	席を廊下側の一番後ろにして，教室に入りやすいようにする。
教科担任	本人	学習プリントを用意し，授業の遅れに対する不安の軽減を図る。
担任・副担任	母親	母親が休みの日に面談をし，気持ちを聴いたり，今後の支援を話し合ったりする。
担任	母親	自分からした家事について，「お母さん助かった。」と言うなど，称賛するようにしてもらう。
生徒指導主任	本人・母親	スクールカウンセラーと連携した対応ができるようにする。
生徒指導部	担任	学級で行う「人間関係づくりのプログラム」の資料を集める。

３の**図３**で示した校内研修等におけるインシデント・プロセス法による事例検討の流れの例は，50分を想定しているが，省略したり，並行して実施したりできる内容もある。様々なパターンが考えられるが，一問一答方式で質疑応答を行う「情報収集」の時間はしっかり確保したい。

４　おわりに

本県における不登校児童生徒数及び暴力行為発生件数は，年々増加している。対応に苦慮することが多くあると思うが，大切なのは，チームで支援策を講じ，個に応じた支援をしていくことである。

インシデント・プロセス法による事例検討が各学校に定着し，児童生徒への多面的な理解と多層的な支援につながることを期待する。

－参考文献－

○　国立特別支援教育総合研究所Webページ『知的障害のある子どもの担任教師と関係者との協力関係推進に関する研究－個別の指導計画の作成に焦点をあてて－』
http://www.nise.go.jp/cms/7,7411,32,142.html
令和３年７月７日閲覧

（教育相談課　梶原　淳）